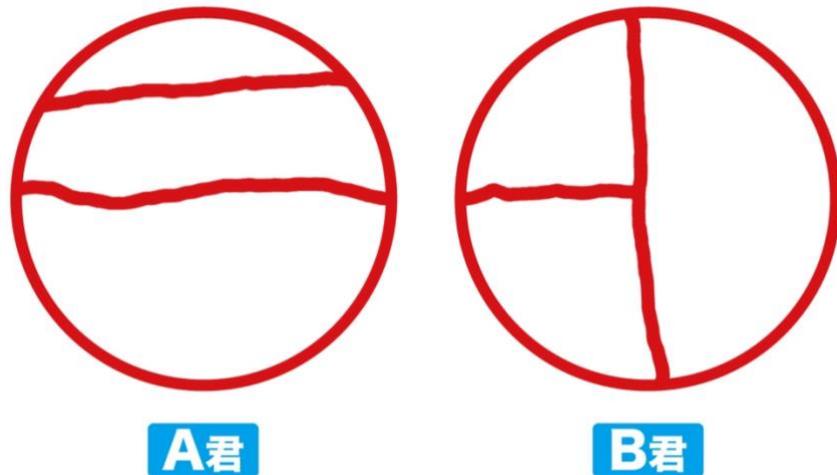


# 中力研だより

第2号 令和6年1月 発行 中学校カウンセリング研究会



(図：『ケーキの切れない非行少年たち』より引用)

このイラストを見てください。これは、精神科医である宮口幸二氏が医療少年院に勤めていた時、「ホールケーキを三等分する」という課題に対して在学中の少年が出した答えの一例です。彼らは殺人や強姦致傷などの凶悪な犯罪を起こした少年たちです。彼らを取り巻く問題の構造のひとつに「境界知能」というキーワードがあります。

## ○ これまで見落とされてきた「境界知能」の子どもたち

「境界知能」とは、平均的なIQとされる85~115という数値と、知的障害の判定基準でもあるIQ69以下には含まれたグレーゾーンの知能の人たちのことを指します。

実は人口の14%が境界知能といわれるなど、私たちの周りにも多く存在します。しかし、日常生活もでき、障害と認められないため、周囲どころか自分さえも気づかないことがほとんどです。

会話や言葉を認知する機能が低く、コミュニケーションが取れない、集中できない、漢字が覚えられないなど学習の土台ができないまま成人を迎えるケースがほとんどです。

今回は、人口の14%もいながら、誰にも気づかれない「境界知能」について、宮口幸二著『ケーキの切れない非行少年たち』を題材に、考えます。



(図：『東洋経済オンライン』より引用)

## ○ 世の中のすべてが歪んで見えている？

著者が医療少年院に赴任したころ、「境界知能」の少年たちと関わるなかで、次のような感想を持たれたようです。

\*これを見た時のショックはいまだに忘れられません。私の中でそれまでもっていた発達障害や知的障害のイメージがガラガラ崩れました。ある人に見せて感想をもらったことがあるのですが、彼は淡々と「写すのが苦手なのですね」と答えました。確かにそうかもしれませんが、そんな単純な問題ではないのです。このような絵を描いているのが、何人にも怪我を負わせるような凶悪犯罪を行ってきた少年であること、そして（中略）**“世の中のこと全てが歪んで見えている可能性がある”**ということなのです。



これまで多くの非行少年たちと面接してきました。凶悪犯罪を行なった少年に、何故そんなことを行なったのかと尋ねても、難しすぎてその理由を答えられないという子がかなりいたのです。更生のためには、自分のやった非行としっかりと向き合うこと、被害者のことも考えて内省すること、自己洞察などが必要ですが、そもそもその力がないのです。つまり、「反省以前の問題」なのです。

一番ショックだったのが、

- ・簡単な足し算や引き算ができない
- ・漢字が読めない
- ・簡単な図形を写せない
- ・短い文章すら復唱できない

といった少年が大勢いたことでした。**見る力、聞く力、見えないものを想像する力がとても弱く、**そのせいで勉強が苦手というだけでなく、話を聞き間違えたり、周りの状況が読めなくて対人関係で失敗したり、イジメに遭ったりしていたのです。そして、それが非行の原因にもなっていることを知ったのです。

\*ホールケーキ三等分のイラストのこと（註：中力研だより筆者）

「世の中のこと全てが歪んで」見えている子どもたちがいるということを知らないまま、問題行動を繰り返す子どもたちに、「不真面目だ」「やる気ない」と厳しい指導をすることが、その子にとっての支援、指導に繋がっていないということは容易に想像できると思います。本来は支援されないといけない子どもたちが、なぜ問題行動を繰り返すのかという点に、私たちは着目せねばなりません。

## ○ 学校で気づかれない子どもたち

では「境界知能」の子どもたちは、いったい学校でどんな生活を送っているのでしょうか。

彼らの生育歴を調べてみると、大体、小学校2年生くらいから、勉強についていけなくなり、友だちから馬鹿にされたり、イジメに遭ったり、先生からは不真面目だと思われたり、家庭内で虐待を受けていたりします。そして学校に行かなくなったり、暴力や万引きなど様々な問題行動を起こしたりし始めます。しかし、小学校では「厄介な子」として扱われるだけで、軽度知的障害や境界知能（明らかな知的障害ではないが状況によっては支援が必要）があったとしても、その障害に気づかれることは殆どありません。中学生になるともう手をつけられません。犯罪によって被害者を作り、逮捕され、少年鑑別所に入って、そこで初めて「障害があったのだ」と気づかれるのです。

医療少年院では、彼らにこれまでの人生を表した”人生山あり谷ありマップ”を書いてもらっていました。縦軸の上方向によかったこと、下方向に悪かったことを書いてもらいます。横軸は時間です。ある少年は、小学校2～4年まで学校によく遅刻していて万引きまでしていたのですが、小学校5年になってとても熱心な先生に出会えて、“勉強が面白い”“学校が楽しい”と感じるまでになりました。万引きしていた子が学校が楽しい、勉強



が楽しいと言い出したのです。きっと小学校5年時の担任の先生にとったらこの子はとてもやり甲斐のある子どもだったはずですが、しかし、彼の人生は中学に入って急降下していきます。“学校に遅刻”“学校をさぼる” “悪いことをして逮捕される”などして、少年院に入ることになってしまいました。

しかし、どうして中学校に入って急降下したのでしょうか？ 実際に少年に聞いてみたところ、「中学に入ったら全く勉強が分からなくなった。でも誰も教えてくれなかった。勉強が分からないので学校が面白くなくなり、さぼるようになった。それから悪いことをし始めた」と答えました。

つまりこの少年の場合、中学校で先生が障害に気づいてくれて、熱心に勉強への指導をしてくれていたら非行化しなかったでしょうし、被害者も生まれなかったのです。非行化を防ぐためにも、勉強への支援がとても大切だと感じたケースでした。

非行は突然降ってきません。生まれてから現在の非行まで、全て繋がっています。もちろん多くの支援者がさまざまな場面で関わってきた例もあります。でもその支援がうまくいかず、どうにも手に負えなくなった子どもたちが、最終的に行き着くところが少年院だったのです。子どもが少年院に行くということはある意味、“教育の敗北”でもあるのです。

「境界知能」が人口の14%いるとすれば、35人学級で約5人が相当します。しんどい思いをしている「気づかれない子どもたち」は、学校の中にたくさんいます。だからこそ、普通の学校での支援が必要なのです。

中学校カウンセリング研究会では、以下の研究テーマとサブテーマで、活動・研究をしています。

## 研究テーマ「中学校教育活動における教育相談(カウンセリング)の効果的な活かし方」

### サブテーマ「～子どもや保護者の行動が示す深層に迫るために

#### カウンセリングに関する専門的な視点を学び,実践力を高める～」

##### 〔研究テーマ・サブテーマ設定理由〕

本研究会では、「中学校教育活動における教育相談(カウンセリング)の効果的な活かし方」を研究テーマの主題に、長年研究してきている。その主題を大切にしながら、今年度はサブテーマを「～子どもや保護者の行動が示す深層に迫るためにカウンセリングに関する専門的な視点を学び,実践力を高める～」と設定した。本研究会では、教育相談(カウンセリング)とは、教師の基本的な在り方(人との関わり方)を示すものとして捉えている。カウンセリングに関する専門的な知識・技能は、人の心を扱っているため、生徒や保護者理解を深めることに役立ち、人と人との関わりの中で生きてくる。つまり、さまざまな教育場面や状況で効果を発揮する。さらに、それらの専門的な知識・技能を学んでいくことで、日頃の実践を自分自身で振り返ることができ、自分の経験や感覚に基づいた実践は、理論的な背景に裏付けされたものになっていく。経験や感覚に理論の名前が付き、働きかけの引き出しが増え、自分の実践に手応えも出てくる。

ここ数年のカウンセリング業界では、心の専門家である「公認心理士」という国家資格が全国的に注目を集めている。各領域で心の健康問題が複雑化かつ多様化しており、それらへの対応が急務になっている。本研究会にも、「公認心理師」資格を取得している役員が在籍しており、日々活動をしている。このような状況の中で、今年度は子どもや保護者とのかかわり方の研究を「カウンセリングに関する専門的な視点」を学ぶことで試みる。また、多面的な視点を研究する過程で、「子どもや保護者の行動が示す深層に迫れる」ことを確かめていく。「子どもや保護者の行動の深層に迫る」ことで、支援や指導の質が向上することを狙いとする。このようなカウンセリングの視点が、現在中学校現場で特に必要であると考えられる。

子どもや保護者の行動には、必ず意味がある。しかし、その意味に迫れるかどうか、その深さを推し量れるかどうかは、本当に難しい課題である。反社会的行動に現れるもの、非社会的な行動に現れるもの、なにげない言動に現れるもの。さまざまな形となって現れている。昨今の傾向としては、ストレスを言語化できずに、身体化、行動化をしてしまうケースが多くなっているということである。それぞれの子どもに、それぞれの思いがあり、それぞれの状況がある。子どもを支える保護者にも、それぞれの思いがある。それらに迫るための視点、少しでも深層を感じることができる視点の研究を進めていく。そして、それらを追求していく姿勢が、子どもの行動の変容に繋がることを確かめる。

コロナ禍において、私たちの生活する環境は大きく変わりました。生徒・保護者・教職員のそれぞれが、不慣れな生活を余儀なくされています。本来は“からだの距離”をとるためのソーシャルディスタンスも、“心の距離”まで離れてしまっている現状があります。昨今の社会状況を鑑みれば、「心に寄り添うこと」の重要性がさらに高まっています。人と人との関わりが大切にされなければ、パーソナリティと社会性の発達が危機的な状況になります。それ以外のさまざまな場面でも、多くの危機に直面することになります。これからますます、カウンセリングの視点での生徒理解、生徒支援、生徒指導等が必要です。一緒に中学校カウンセリング研究会で、活動しませんか？ご興味を持たれた際には下記までご連絡ください。

※中カ研のホームページ (<https://portal.kyotocity.ed.jp/taxonomy/term/79>) も随時、公開しています。合わせてご覧いただければと思います。過去の中カ研だよりの閲覧については、学校のパソコンから以下の手順で入っていただければ見ることができます。

[総合教材ポータルサイト→教育研究関連→教育研究団体HP一覧  
→中学校→教育相談・カウンセリング]

※ご意見・ご感想、ご質問、子どもの関わりなどでお困りの点などがありましたら、ご連絡ください。中学校カウンセリング研究会の方でその話題を取り上げて、研究を進めていきたいと思っています。必要に応じて、電子メールでもご返信ください。

椎葉 一勲 [神川中学校教諭] まで